CLOSE-UP INTERVIEW

観世流能楽師 観世三郎太さんに聞く

能楽の根源を守りつつ 新たな試みに挑戦し 観世流を後世に伝える

[聞き手]外川智恵さん 大正大学表現学部教授

かんぜ・さぶろうた
1999年生まれ、東京都出身。二十六世観世宗家・観世清和の嫡男として生まれる。3歳より父である観世清和に師事。5歳の時に「鞍馬天狗」で初舞台を踏む。その後、2009年に10歳で初シテを勤める。2022年に立教大学法学部を卒業後も能楽師として舞台に立ち続ける。

人生で能楽師でなかったことはない

外川　本日は、GINZA SIXの地下にある観世能楽堂に来ています。格式のある空間でお話を伺うのは、観世流能楽師の観世三郎太さんです。能楽を大成した観阿弥、世阿弥を先祖とする二十六世観世宗家・観世清和氏のご子息で、1年前に立教大学を卒業され、能楽の道にまい進されています。そんな三郎太さんに、幼少期から大学時代、そして将来のことまで幅広くお話を伺います。三郎太さんは、お父さまの下で稽古に励み、5歳で初舞台を踏まれたそうですね。幼い頃から能楽の世界で育ってこられたわけですが、観世流を継ぐことをいつ頃から意識されていたのでしょうか。

観世　観世流を継ぐというよりも、能楽師として生きていくという意識がずっとありました。能楽は幼い頃から日々、触れているものでもありますし、自分の生活の中になくてはならない存在になっていましたから。

外川　私の実家は太宰治の短編小説「富嶽百景」の舞台となった御坂峠の天下茶屋という店なのですが、弟が継ぐことになった時、「他にやってみたい仕事はなかったの？」と聞くと、彼は継ぐことが当たり前だと思っていたのか、抵抗感はなかったようです。三郎太さんの場合、そうした抵抗感のようなものはありませんでしたか。

観世　他の仕事で生きていきたいという気持ちはなかったのですが、経験として就職活動はやってみたかったですね。企業でビジネスマンとして働いてみて、その世界がどういうものなのか知りたいという気持ちはありました。自分の見識を広げてみたかったという感覚です。

外川　子どもの頃から舞台に立たれていましたが、他のお子さんと違う環境に違和感を持ったことはなかったのでしょうか。

観世　学校を早退したり遅刻したりする時も、先生やクラスメイトが、「頑張ってきてね！」と応援してくれたり、学校行事の一環として舞台を観に来てくださったり。学校全体が僕のことを応援してくださり、環境を作ってくれていたので、もっと友達と遊びたいから嫌だというような抵抗感はありませんでした。

外川　「自分は能楽師だ」という自覚を持たれたのはいつ頃なのでしょうか。

観世　生まれた時から周りは能の環境でしたので、自覚を持ったタイミングというのはないですね。人生で、自分

が能楽師じゃないと思ったことがないですから。

過去の自分を恥ずかしく思えるのは成長した証

外川　ご自身の舞い方は変化するものですか。自分の舞が変化したと感じることはありますか。

観世　過去の自分の舞の映像を見比べてみると、1年の間でも変化しているのがよく分かります。自分で言うのもなんですが、やはりちゃんと稽古の成果が表れてレベルが上がっていることを実感します。

外川　そのことを私自身に置き換えてみると、アナウンスメントにおいて、当時はそれが正しいと思っていたのに、数年後に映像を見返した時、今とは解釈が違ったりして恥ずかしくなり、もっと頑張らなければと反省することがあります。三郎太さんはご自身の過去の舞を見て、そのように感じることはありますか。

観世　何年も前の舞を見ると、確かにあの時は未熟だったと恥ずかしくなることもありますが、恥ずかしいと思えること自体が、自分が成長していることの証なのではないかと思います。過去の映像を見ることは、努力は裏切らないということを最も実感できる方法なので、恥ずかしいと思っても、時々、見るようにしています。

近くて遠い存在である父

外川　物心ついた頃から、お父さまから能楽の指導を受けられているそうですね。お父さまとはどのような関係性なのですか。

観世　父親ですから家族として自分にとって一番近い存在なのですが、能楽師としては一番遠い存在です。まさに近くて遠い存在ですね。

外川　父親というよりも先生として接している時間の方が長いのでしょうね。稽古中には、叱るなど厳しくご指導をされているのでしょうか。

観世　一度も叱られたことはないですね。父が先生として稽古をつける時は、僕を子どもではなく一人の大人として扱います。ですから、お互いに敬語で接しますし、声を荒らげることもありません。何か間違った時には、冷静

観世 三郎太さん

に「それは違います」と言われるだけです。

外川　お父さまを尊敬されているのが伝わってきます。

観世　能楽師としては、やはり舞台に立っている時のオーラのようなものが全然違います。生きているうちに追い付くことが、かなえたい夢になっています。父としては、忙しい中でも家族を大切にしてくれていたことに今も感謝しています。学校の卒業式や運動会にも来てくれましたが、そういう日はだいたい土・日で、舞台があるんです。しかし、ギリギリまで参加してから、舞台に直行したり、家族のために時間をやりくりしてくれていました。幼い頃はもっと一緒に遊んでほしいと思ったこともありましたが、今になってみるとそのすごさが分かります。今の僕よりももっと忙しかったはずなのに、家族のために時間を作ってくれていた。自分だったら無理だなと思ってしまいますね。能楽の伝統を大切にしながらも家族も大事にする姿勢は、僕も見習っていきたいと思います。

大学で深めた知識と教養が芸の助けとなる

外川　立教大学を卒業して1年が経ちましたが、大学生活を振り返ってみていかがでしたか。

観世　2年生の頃からコロナ禍の影響であまりキャンパスには通えませんでしたが、大学に行って本当に良かったと思います。能楽の世界に没頭するだけでなく、自分が知らない世界に触れられたことはとても良い刺激になりました。

外川　学問と能楽の両立は大変だったかと思いますが、いかがでしょうか。

観世　稽古や舞台があったので、授業に出席できないことも多くありましたが、無事に卒業できました。

外川　忙しい学生生活の中でも、特に印象に残っている授業などがあれば教えてください。

観世　一番印象に残っているのはゼミですね。とても刺激的でした。法律だけでなく、学生それぞれが興味を持ったさまざまなテーマについてグループワークを行うのですが、普段、自分が関心を持つことがないであろうテーマをみんなで掘り下げたことで、知識も教養も深めることができました。

外川　知識や教養が、舞に影響することもあるのでしょうか。

外川 智恵さん

観世　直接的な影響があるかは分かりませんが、知識や経験から登場人物の心情の機微が分かるようになると、舞い方も微妙に変わってくるのではないかと思います。

外川　法学を学ぶ中で、能楽と共通する点など新しい発見はありましたか。

観世　法学に限らず、学問を極めるには、本を読んで先人の知恵を学んだり、自分で考えを深めたりしなければなりません。そうでないと、理解したつもりで理解できていないことがある。それは能楽の場合も同じです。一方で、学問は勉強していく中で新しい発見に出合うことがありますし、法学の場合は法律自体が変わっていくこともあります。その点、能楽で学ぶべきことは大昔から変わらない不変のものです。学問は学ぶ中で新しいものや変化が生まれますが、能楽は既存のものを追求していく。そこが大きな違いだと思いました。

能楽の基本を崩さず若い世代にアプローチしたい

外川　能楽は多くの人にとって身近とは言い難いものかと思います。特に若い世代の人にとっては馴染みが薄いのではないかと思いますが、同じ若い世代の人間として、三郎太さんはどのように感じていますか。

観世　若い世代は伝統芸能に興味がないと思っている方が多いですが、それは違うのではないかと感じています。逆に関心があり過ぎるから、観に行くのをためらってしまうのではないでしょうか。実際、周りの友人にも興味はあるけれど、自分のような若者が行っていいのだろうかと考えている人が多いんです。ネット環境やスマートフォンが発達して、何かあったらすぐにSNSで拡散されてしまうような時代ですから、気持ちが繊細になってしまっているのかもしれません。

外川　確かに。服装や鑑賞の仕方など、自分がその場にふさわしい振る舞いができるかを考えることもありますね。

観世　そうですね。今の若い人は意外と周囲に対して敏感で、礼儀作法なども気にするんです。公演中、うとうとされる方もいらっしゃいますが、若者は頑張って眠気に耐えようとしているのが分かります。また、公演前にスマートフォンで演目について調べて、予備知識をつけて観に来てくれる人もいます。今後は能楽堂という場所が、そんなに堅苦しい場所ではなく、若い人にももっと気軽に足を運んでもらえる場所なのだと広く伝えていくことにも力

を入れていきたいですね。

外川　能楽に触れるきっかけ作りとして取り組まれていることはありますか。

観世　仮想現実空間を再現して上演する『VR能　攻殻機動隊』など新しい試みにも挑戦していますが、それを入り口に能楽堂や実際の舞台にも足を運んでもらえるようになればと思っています。ただ、新しいことをやりながらも能楽の基本を崩さないことを常に大切にしています。

外川　なるほど。基本を崩さずに新しいことを取り入れる。基本を知っているからこそできることかもしれませんね。

観世　われわれにとっては能楽の基本が最も大事なことです。たとえ多くの方に足を運んでいただけそうな面白い試みでも、伝えたい能楽の姿と違っていれば、できないという判断をします。やはり、能楽の根源にあるものはしっかり守らなければならないと思っています。

〝息を合わせる〟ことで一つの舞台を作り上げる

外川　三郎太さんは、代々受け継がれてきた能楽の精神性や芸術性などを、しっかりと受け止められていると感じます。

観世　日本最古の舞台芸術でありますし、これほどまでに昔から変わらず、基本を崩さずに続けられてきた芸能は他にないと思います。やはり僕自身も言葉に表しきれない神聖さというものを能楽には感じます。

外川　神聖さ。能楽においてはとても重要なことなのでしょうね。その能楽の真髄を後世へ伝えていくために、努力されていることはありますか。

観世　能楽の世界では、舞台だけでなく、見えない所も大切にしています。普通の演劇の場合、緞帳（どんちょう）が上がって芝居が始まりますが、能楽の場合は舞台上への出入りも見せる。それがとても重要で、出入りの際にも細かな決まり事があり、しっかり気持ちを入れて臨むのです。そのために、楽屋ではおしゃべりをしたり、スマートフォンを見ることもなく、正座をして先輩の舞台の様子に耳を傾けたり、自分の気持ちを高めたりしています。そうした舞台上では見えない努力や気持ちの入れ方が、観客の皆さまにも伝わっているのではないかと思います。

外川　目に見えないというところで言いますと、能楽では〝息を合わせる〟ことを大切にしていると伺っています。これは一体どういうものなのでしょう。

観世　オーケストラなどでは、楽譜をもとに演奏しますが、能楽の音というのは、完璧に楽譜で表し切れるものではありません。そのため、〝息を盗む〟という表現をするのですが、囃子方（はやしかた）が息を吸う音を聞いたり、自分の中でコミ（次の動作に移る際の間）を取ったりして、タイミングを合わせる必要があります。そうして互いに息を合わせていくことで、演者が心を一つにして舞台を作り上げていきます。舞台だけでなく、楽屋から心を一つにできるように、楽屋は個室ではなく、演者同士の姿が見えるような空間になっています。

伝統芸能だからと構えず肩の力を抜いて楽しんでほしい

外川　現代演劇では、演出家が舞台を取り仕切ると聞いていますが、能楽の場合はみんなで舞台を作っていくのですね。

観世　能楽には演出家はいませんが、シテ（主役）が舞台の軸になっています。演者それぞれの意図がぶつかり合いながらも、それをシテがくみ取って舞台をまとめていく。誰かが早く息を吸ったら、この演者はこう動きたいんだとか、ゆっくり息を吸ったら緩やかにいきたいんだとか、それこそ息遣いを読み取ることが大切です。みんなの主張に折り合いをつけながら舞台が作られるのも、能楽の面白さの一つだと思います。

外川　まさに精神性を強く感じますね。２０１６年には、アメリカ・ニューヨークで開催された舞台芸術の祭典「リンカーンセンターフェスティバル」でも公演されています。海外の方にもそうした日本の伝統的な精神性というものは伝わるのでしょうか。

観世　日本のお客さまの場合は、日本の伝統芸能だから理解しなければならないと構えられることもありますが、海外のお客さまはそもそも言葉が分からないので、無理に物語を理解しようとするのではなく、装束の美しさや囃子方の音など、自分なりの観点で楽しみ方を見出してくれています。

外川　知識よりも感性で観るというか、知らない方がより素直に受け止められるのかもしれませんね。

観世　日本人が言葉を理解できなくても、リズムや雰囲気にひかれて洋楽を聴いている感覚かもしれません。日本のお客さまにもそんなふうに、もっと肩の力を抜いて能楽を楽しんでもらいたいですね。

納得することなく さらなる高みを目指す

外川　三郎太さんは、納得のいく舞台を経験したことはありますか。

観世　一度もないですね。一定以上のレベルでできたと思うことはもちろん、何回もありますが、毎回、もっとあればよかったとか、今度はここをこう直そうとか、反省点は必ず生まれます。自分で納得してしまうとそこで終わりだと思っていますので、まだ上があるという意識を持ちながら、その先の発展を目指していきたいと思っています。

外川　お父さまもお祖父さまも代々、そうして能楽の道を歩まれて来たのでしょうね。

観世　そうですね。80歳になる方の舞台を観ていると、同じ舞でも全く別物に見えることがあります。詞章（ししょう）（台詞）や型など基本的なところは全く同じなのですが、ちょっとしたことで雰囲気がガラリと変わるんです。若い時には若いなりの良い演技がありますし、年を取るにつれて味の出た演技ができるようになる。そうした変化も楽しみながら、ずっと修行をしていきたいと思っています。

外川　能楽師に引退はあるのですか。

観世　基本的に引退はありません。もちろん身体を悪くして続けられなくなることはありますが、急死した祖父は亡くなった当日まで舞台に立っていました。父もよく、最後の瞬間まで舞台を続けたいと言っています。

外川　最後に、能楽師としてではなく20代の男性として、どんな生活を送っているのか聞かせていただけますか。

観世　高校時代の友人と遊ぶことが多いのですが、やることは同年代の人たちと変わりません。お酒を飲みに行って、自分たちの将来について朝まで語り合ったり。僕らはゆとり世代と呼ばれていますが、周りは結構、世の中のことや自分の人生のことを真剣に考えていますよ。

外川　三郎太さんのお話を聞けば、大人たちが抱いている現代の若者像も変わるかもしれませんね。本日はとても楽しい時間を過ごさせていただきありがとうございました。